



教皇様の聲

7

219 号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

大聖年のメッセージを伝えよう

大聖年準備のための中央委員会第 2 回会合の締め括りに当たり、それぞれの司教団を代表してお集まりになった皆さんを歓迎いたします。（…）皆さんの会合は、大聖年を祝う司牧計画に焦点を合わせる重要な機会です。大まかな日程を立て、巡礼たちを迎える具体的な計画を練らなければなりません。皆さんの価値ある貢献によって、聖年の祝いがより実り豊かで意義あるものになることを大変嬉しく思います。

この歴史的な日に向けて、月日はあつという間に進みます。聖年の扉が開き、全教会の恵みと和解の年が始まる瞬間が近づきつつあります。

外的な組織に注がれる努力も賞賛に価しますが、そこには内的な準備が伴ってなければなりません。主の賜物を受けるための、心の準備のことです。何よりも、神への感覚を取り戻し、神が被造物と歴史の主であることを認識する必要があります。そうすれば、完全な超自然の愛を探し求めたいという願いと共に、各自が心からの愛と信頼をもって思いや選択を神に委ねるべきであることに思い至るでしょう。

新たな聖霊降臨に備える

キリストの生誕二千年という記念の年は、贖いの秘義の中心に私たちを導きます。「偉大な神であり救世主であるイエズス・キリストの現われ…。」（ティト 2・12）一人の例外もなく全ての人を呼ばれるのは神です。救いのわざの実りにあずかるようお呼びになります。そのわざは聖霊の不思議な働きによって達成され、地上のすみずみまで広がります。大聖年はこの恩寵の瞬間をもう一度生きるよう、また救いの賜物を受けるためには改心して御父と和解し、御父との愛の交わりに返ることが必要だと悟るよう促します。

けれどもこの改心は、兄弟姉妹との和解につながる限り本物とは言えません。みな同じ御父の子なのですから。それは社会的な次元で神との友情を取り戻すことです。そこには家族のみならず、職場の同僚や市民共同体のメンバーも含まれます。私たちを赦し、温かく迎え入れる主は、周囲の全ての人の間の平和と

一致のもととなる使命を委ねておられます。

キリストが提供して下さるこの豊かな恩寵を取り戻し、キリストの生命にあずかるには、それにふさわしい霊的な準備をしなければなりません。私たちはこの数年、その準備に励んできました。私が全教会に提案した準備のためのプログラムを皆さんもよくご存じのはずです。私は全キリスト信者が三位一体の神の秘義への信仰を新たにし、救い主キリストの秘義を深く知ることを願っていました。

このようにして始めて、地上を旅する神の民が信仰への熱意を再発見し、取り戻すことができ、全てのキリスト信者がキリストとの出会いという体験を味わうことができるでしょう。キリストは教師、牧者、大司祭であり、あらゆる良心の導き手です。こうして信者は、新たな聖霊降臨の賜物に備え、今や以前にも増して切実となったこと、すなわち父である神は人となられた御子を通じて人間に語りかけるだけでなく、人間を捜し、愛しておられるという真理をもう一度見出すことを熱望しつつ、紀元二千年を迎えるのです。

皆さんに課せられた仕事は重大です。皆さんの国々はすでに期待の中にあります。わくわくするような希望が高まっています。とりわけそこには、福音の真理を通して知った、本当の内的平和への願いがあります。全ての人が希望の言葉を聞くべきです。「労苦する人、重荷を負う人はすべて私のもとに来るがよい。私はあなたたちを休ませよう。」（マテオ 11・28）

聖年の目標は改心と内的刷新

ですから皆さんには、大聖年のメッセージを（キリスト信者か否かを問わず）人々に伝えるための企てを絶えず進めていただきたいのです。司牧計画が周知のものとなって実行されているか、秘跡に関しては、神のみことばに関しては、典礼生活や祈りに関しては、教会一致のための対話の基本テーマに関しては、キリスト教以外の人々との会合についてはどうかにご留意下さい。情報が回っているか、ニュースが伝わっているか、共同体との対話が続いているかを、各共同体での

期待を念頭において配慮して下さい。紀元二千年への変わり目が刷新と恩寵の時となるようご配慮下さい。

● ご存じのように、紀元二千年の祝いが特別だというのは、それがローマと聖地で、また個々の地方教会で、同時に祝われる点です。

聖年の祝いにつきものの「巡礼」は、はるか昔から宗教心の発露であり、どんな民族や宗教においても、償いを第一目的としていました。巡礼は人間の最終的な運命を映し出しています。キリスト信者は、この地上には最終的な住居がなく、真の故郷を目指して旅の途中にあることを知っていますから、ローマや聖地、その他聖なる場所への巡礼は、私たちの全生涯が神に向かう旅であることを強調するものなのです。巡礼を実りあるものとするためには、専心して祈る時間、償いと改心を表わす行為、神への愛の生きた証拠と解される兄弟的な愛徳のわざが必要です。このような精神なら、聖年はどこの教会、団体、教会共同体においても愛徳を表わす機会を増やしてくれることでしょう。

愛の具体的なしるしがあって初めて、平和と普遍的兄弟愛を告げる、長く待ち望まれた刷新が本物の進歩をとげたことが示されるでしょう。

皆さんの課題はこの目的にかなった企てを賢明に助けること、ローマ教会の課題は広い心で両手を広げ、生き生きとした寛大な友情をもって皆さんを迎えることです。「愛の交わりを取り仕切る」ペトロの座は、全世界の教会を含んだこの輪に入り、積極的に働きたい

と願っています。今日、私たちは正義と社会の発展への特別な感受性をもった証人とならなければなりません。緊張状態を克服するために、紛争の論理を超える他の方法が必ずあること、それを探さねばならないことを私たちは強く確信しています。また、多くの国が苦しんでいる困難な経済状況を解決し、人間以下の悲惨や奴隷状態に陥っている全ての人々を解放するための計画を立てることができると確信しています。

● 大聖年は教会にとって摂理的な出来事ですが、目的そのものではありません。荘厳な祭儀で神の子・私たちの救い主の受肉を記念し、キリスト信者に改心と内的刷新を迫るための一つの手段なのです。信仰に強められた信者は、新たな熱意をもって福音のメッセージを宣言し、福音を受け入れることがもっと人間的な、さらにもっとキリスト教的な世界を築く道であると示すことができるようになるでしょう。

教会にとって重大なこの出来事に備える皆さんの熱心な奉仕を祝された処女に委ね、合わせて教会と全世界のために豊かな成果を祈ります。

大聖年は、全世界の司教たちのみならず政治家たちの間でも大いに興味をかき立てています。二千年を迎えるその日は、開かれた態度を生みます。(…) ご一緒にお告げの祈りを唱え、この会見を終えましょう。これはキリストの託身を告げる祈りですから。

愛と感謝を込めて、使徒の祝福を送ります。(大聖年準備中央委員会の第2回会合でのお話。98・2・12)

聖霊降臨は神のあらわれ

聖霊シリーズ 6

1 私たちが聖霊について知っている事柄は、イエズスから教わった知識に基づいています。そのほとんどは、イエズスが御父のもとへ旅立つこととお話しになった時のことでした。「私が去れば…聖霊を送る。」(ヨハネ16・7参照)キリストの過越の「旅立ち」は、十字架と復活と昇天を経て、聖霊降臨で頂点に達します。この時、聖霊は、高間で「イエズスの母と共に」「心一つにして祈っていた」(使徒行録1・14参照)使徒たちと、最初の教会の核を形作っていた人々の上に降りました。この時、聖霊はまだ「ひそかな神」(イザヤ45・15参照)のままです。教会とこの世の歴史全体を通じて、今後も知られざるままでしょう。目に見える姿で「人となって私たちの間に住まわれた」(ヨハネ1・14)キリスト、御父と一つであるみことばのかけに聖霊は「身を隠して」いると言えるかもしれません。

2 託身(受肉)の時、聖霊は目に見える現われ方せず、「ひそかな神」のままマリアを秘義のうちに包みます。神が人となるために選ばれた女性・処女マリアに向かって天使は言いました。「聖霊があなたに

くだり、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。」(ルカ1・35)同様に、聖霊は生まれ出ようとする教会を「覆い」、その影響のもとに「神の偉大なわざを宣言する」(使徒2・11参照)ための力を与えました。託身の時、マリアの胎内で起こったことが今、さらなる成就を迎えます。聖霊は姿を現わずに「ひそかな神」として働くのです。

3 とは言え、聖霊降臨は力強い神の顕現であり、イスラエルがモーセのもとにエジプトを離れた後の、シナイ山での顕現の完成とも言えます。律法学者の伝承によればシナイ山での顕現は、エジプト脱出の五十日後、つまり五旬祭の日の出来事でした。「シナイの山は煙に包まれてみえた。その山の上に主が、火の形で下られたからであった。煙は大かまどの煙のように立ちのぼり、民は恐れにふるえた。」(脱出19・18)そこには神の大いなる力、「ある者である」(脱出3・14参照)御方の測り知れない超越性が示されています。すでにホレブ山のふもとで、モーセは燃えているのに焼け落ちることのない茂みの中から語りかける声を聞

きました。「近寄るな。足の履き物を脱げ。おまえが立っているところは、聖なる地だからである。」(脱出3・5) 今、シナイ山のふもとで主は仰せになります。「下れ。そして、民にねんごろに告げよ、主を見ようとして山すその境を越えるなど。もしそれを越えるなら、民の多くは死ぬことになる。」(同19・21)

4 聖霊降臨は、神が少しずつ人間にご自分をお現わしになった一連の顕現の最後にあたります。神の自己啓示は、こうして頂点に達しました。これによって、神はご自分の人々が神の全能の力と超越性、それと共に「エンマヌエル」(神が共にまします)の内在することへの信仰を持つよう願われたのです。

聖霊降臨は、全教会の始まりに当たり、マリアを含めた教会最初の中心グループに直接に向けられた神の顕現でした。こうして旧約時代に始まる長い歩みが終わりました。高間で起こった出来事の詳細は使徒行録2・1～13に記されていますが、よく見ると、以前の顕現、特にシナイ山の場合を思わせる個々の要素に気づきます。ルカは聖霊の降臨を描くとき、それらを頭に置いていたかのようです。ルカによれば、高間での顕現はシナイ山の場合と似通った現象で始まりました。「五旬祭の日が来て彼らが一緒に集まっていると、突然、天から激しい風が吹いてくるような音が聞こえて、彼らの座っていた家に満ち、火のような舌が現われ、分かれておのおのの上に止まった。すると、彼らはみな聖霊に満たされ、霊の言わせるままにいろいろの国の言葉で話し始めた。(使徒2・1～4)」

ここには三つの基本的な特徴があります。激しい風が吹くような音、火のような舌、そしていろいろの国の言葉を話す力。これら全ては、象徴的な価値に満ちて心に映ります。これらの事実を考えると、高間にいた人々が「聖霊に満たされた」と語る使徒行録の著者が念頭に置いていたことを、もっと理解しやすくなるでしょう。

5 「はげしい風の吹くような音」。言語学的に言えば、風(風の一吹き)と「霊」には類縁関係があります。ヘブライ語でもギリシャ語と同様、「風」と「霊」は同じ言葉です。創世の書を見ると、「水の上に神の息吹(ルアー)が舞っていた」(1・2)とあり、ヨハネの福音では「風(プネウマ)は自分の思いのままに吹く」(3・8)とあります。

聖書では、激しい風は神の存在を「知らしめる」ものです。それは神が現われるしるしです。「主は風の翼をつかって馳せる」とサムエルの書下(22・11)にはあります。「私は北の方から嵐の風が襲うのを見た。それは、大きな雲とうずまく火で、まわりに火炎を上げていた。」これはエゼキエルの書(1・4)の冒頭に見える顕現の場面です。特に風の息吹は、混沌の中から秩序ある創造を引き出す神の力を表わしています。(創世

1・2参照) それはまた、霊の自由を表わす表現でもあります。「風は自分の思いのままに吹くが、その音を聞いても風がどこから来てどこへ行くかを知るまい。」(ヨハネ3・8) 「激しい風が吹くような音」は聖霊降臨という顕現の最初の要素です。それは、聖霊において働いている神の力を示しています。

6 聖霊降臨の二番目の要素は、火です。「火のような舌が現われた。」(使徒2・3)

旧約に見える神の顕現では、いつも火が伴いました。神とアブラハムの契約の場面でもそうです。(創世15・17参照) 同じく、神がモーセにお現われになったのも、燃え上がっているが焼け落ちることのない茂みの中からでした。(脱出3・2参照) また、砂漠の中で、夜は火の柱がイスラエルの民を導きました。(脱出13・21～22参照) 特に著しいのはシナイ山での神の登場の場面(脱出19・18参照)と、預言者たちが描いた終末の日の顕現です。(イザヤ4・5、64・1、ダニエル7・9など参照) このように、火は神がおられることを表わしています。聖書はいくたびか、「私たちの神は焼きつくす火である」(ヘブライ12・29、第二法の書4・24、9・3)と述べています。焼き尽くすいけにえでは、捧げものを破壊することよりも、いけにえが神のもとへ「昇った」ことを示す「良い香り」の方が重要でした。そこでは火が「神のしもべ」とも呼ばれているのです。(詩篇103[104]・4参照) 火は人間を罪から清める象徴です。火の中で銀が「清められ」、金が「試される」ように。(ザカリア13・9参照)

聖霊降臨では火を象徴する舌が現われ、高間の一人ひとりの上に止まりました。火が神のおられることの象徴なら、各自の上に止まった火の舌は、神である聖霊が人々の上に下り、彼らが使命を果たせるようご自身の賜物を下されたことを示していると思われま

「いろいろの国の言葉で」が示すもの

7 神の火、聖霊の賜物は「舌」という特定の形で現われました。その意味は、著者が続けて書いているところによれば、こうでした。「彼らは霊の言わせるままにいろいろの国の言葉で話し始めた。」(使徒2・4) 聖霊から来る言葉は火のようで(エレミア5・14、23・29参照)、単なる人間の言葉では持ち得ない力を帯びています。ここに見られる聖霊降臨における神の現われの三番目の要素では、神である聖霊がご自身を人間に与え、象徴的でもあれば現実のものとも言えるある効果を人間のうちに生じさせます。人間にもとから備わった能力としての話す力、という点から見れば、それは現実のものですが、これらの「ガリラヤ人」たちが自分たちの言葉ないしは方言を使う一方で「いろいろな国の言葉」を話し、集まってきたのが天下のあらゆる国から来た人々であったにも関わらず「おの

おの故国の言葉」を聞いた、という点から見ると、象徴的です。(使徒2・6参照)

「多様な言葉」という象徴性は非常に意味深長です。聖書によれば言語の違いは国や民族の多様性のしるしであり、バベルの塔の後、全地に散っていったことの象徴でした。(創世11・5～9参照) 皆が理解していた一つの共通言語が多く言語に分かれた時、互いに理解できず、混乱が生じるようになりました。バベルの塔という象徴は、聖霊降臨の時のいろいろの国の言葉に引き継がれ、バベル当時の「言葉が乱された」時とは対照的な意味を帯びるようになりました。理解できなかったたくさんの言語が固有の性格を失い、あるいは少なくとも分裂の象徴であることをやめ、使徒たちと教会を通じて様々に異なった出身と言語と文化の人々を霊的な一致に導く聖霊の新たなみわざに道を譲った、と言えるでしょう。それはイエズスが言われたよ

うに、神において皆が一つになる(ヨハネ17・11、21～22参照)ことです。

8 最後に第二バチカン公会議の「神の啓示に関する教義憲章」を見てみましょう。「キリストは…行ないことばをもって、自分の父と自分自身を現わし、また死と復活と栄ある昇天と聖霊の派遣とによって、自分の任務を完了した。キリストだけが、永遠の生命のことばをもち(ヨハネ6・68参照)、地上から引き上げられて、全ての人を自分に引き寄せる(ヨハネ10・32参照)。この秘義は前の世代にはあらわされなかったが(エフェソ3・4～6参照)、今では聖霊において聖なる使徒たちおよび預言者たちに啓示された。それは彼らが福音を宣言し、主イエズス・キリストへの信仰を起こさせ、教会を集めるためである。」(17番) これこそが、人間の心とこの世における、聖霊と教会の偉大なわざなのです。(7・12)

教皇さまの動き

●6・13 ローマで同窓会を開いたハーバード法科大学の卒業生たちを迎えて。「今世紀には史上例を見ない人類への犯罪行為が横行し、それはしばしば合法性を帯びて行なわれました。それでも、法の力が人間の尊厳を守り、平和をはぐくみ、民族間の正義を進める希望がよみがえりつつあります。」「この希望を実現するためには、今以上に効力ある法律を制定するだけでは足りません。もっと大切なのは、法を定める上で基本とも究極の基準ともなる普遍的な道徳法の必要性を認めることです。」

●6・14 正午のお告げの祈りの前に、聖ペトロ広場に集まった信者たちへのお話。「本日は、各地で至聖なるキリストの御体と御血が祝われる日です。」「神が人間のこんなにも近くにおられる。この日を喜ばずにいられますか? 聖体においては、イエズスがエンマウスで弟子たちと共におられた時のように、私たちの傍らにおられるのです。」

●6・14 ローマ大神学校の神学生たちを迎え、バチカン庭園のルルドの洞窟前でミサをあげられる。「ミサは司祭の日々の生活の中心となるものです。ミサの中心性こそは神学校での形成の第一目的であり、司祭をこころざす人々に、意識的で全人格的な忠実を要請します。」

●6・17 恒例の一般謁見で、聖霊降臨をテーマに

紀元二千年に向けたカテケージスのお話を続けられる。「使徒行録に見える聖霊降臨の出来事は、ユダヤの五旬祭と深い関係があります。…五旬祭は次第に、シナイ山での神との契約を祝う祭りという意味を帯びるようになりました。」「聖霊は、罪を免じ神の愛を心に注ぐ、新しい永遠の契約です。…天の父は私たちの石の心をキリストのような肉の心に変え、聖霊に励まされて愛に発する行動が取れるようにしてくださいませ。」「聖霊降臨と共に教会が誕生しました。…聖霊はすべての民族と国々に送られ、人々をキリストの神秘体として一つに結びます。」

●6・19 教皇さまは83回目の海外訪問となるオーストリアへの旅に発たれた。到着地ザルツブルグの空港でのお話。「ヨーロッパ大陸の中央に位置するオーストリアは、大陸統合という目的を掲げる共同体に加わっています。新しいヨーロッパを築き上げるためには、多くの手のみならず多くの心が必要です。出世や金のためでなく、神と人への愛のために脈打つ心が…。ヨーロッパの心が強くすこやかであることを望みます。皆さんの思いと行ないが、全ての人々の尊厳を重視し、どんな形、どんな局面であれ生命を受け入れる堅い意志に裏付けられたものでありますように。人間は神の似姿として造られた…この考えこそ、今日のヨーロッパのかなめの石なのです。」

「教皇様の聲」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448